

撮影が始まって、今年で42年…。まさか、こんなに長く撮り続けることになるとは、思ってもいなかった。

障がいのある姉の長女、姪っ子の奈緒ちゃんと家族の普通の日々を、何日間か撮ってまとめようと、ちょっとした思いつきから始まった企画…。「映画」と呼べるほど立派なものじゃない、ささやかなプライベートムービーのつもりで。

主人公の奈緒ちゃんは「長くは生きられない…」と医者に言われるほど、重くてんかんと知的障がいを併せ持っていたから、せめて、元気なうちにその姿を記録し、動く家族のアルバムのような短い映像を創って、奈緒ちゃんの家族にプレゼントしよう、と考えていただけのことだった。

気がついたら、42年間撮影が続き、4本の長編ドキュメンタリー映画が完成し、今、5本目の映画『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』の編集が佳境に入っている。

「長く生きられない…」と言われた奈緒ちゃんが50歳になったんだから、ずっと見守ってきた親戚のおじさんとしては、映画にしないわけにいかないじゃないですか…。

撮影が始まったのは奈緒ちゃんが9歳の正月。だから、それまでの記録は動画ではなく、時々私が姉の家に行って撮ったスチールがあるだけ…。

奈緒ちゃんが一番大変だった、生まれて間もない頃のことは数枚ある写真と、姉の記憶をたどるしかないのだ。

「記録」というよりも「記憶」。
私はドキュメンタリー映画は、むしろ「記憶」が語りかける物語のような気がしている。

姉（奈緒ちゃんのお母さん）は、一番大変だった幼い頃の奈緒ちゃんのこと、その頃の母親としての自分自身のことを語る時には、とても雄弁になり、生き生きとした

表情になる。時には涙を浮かべたりしながらも、言葉が言葉と呼ぶ、という感じの語りを聴かせてくれる。

辛い思い出に違いないのに…。

「悲しき時のみ
詩をたまふ神
雁渡」

小児科医で俳人の友、細谷亮太氏の名句が言うように、辛い悲しい時にこそ「言葉」がやって来て、その想いをカタチにし、心を癒してくれるのだろう。

「記録」というよりも「記憶」。
ひとりの人の中で、「記録」が「記憶」に置き換えられていくことで、やっと持ち堪えて生きながらえることだってあるのだから。

勘違いや思い過ごしを含め語られる物語…「記憶」。
それでいい。

私的で個人的な物語を語りかけることこそが映画の可能性であり魅力なのだと思う。

伊勢真一の「真」を私はそんな風に受け止められるようになった。

記録映画作家というほど上等な肩書きではなく「記憶」映画作家ということかな？

「記憶」は過去のことにとどまらない。
「記憶」は今のこと、これからのことに大きく翼をひろげ、想いを深めることができるのだ…。

もうすぐ『大好き』という名の「記憶」映画があなたの空に飛んで行くはずだ。

耳を澄まし、眼を凝らして見てもらえたら嬉しい。

あなたの「記憶」に重なり合うことを願って…。